

IB教育におけるTAP（自由研究）の活用に関して

How to Apply TAP (Jiyukenkyu) to IB Education

大澤 誕也

Nobuya Osawa

キーワード：IBプログラム、K-12、自由研究、TAP、IB学習者像

Keywords：IB program, K-12, Jiyukenkyu, TAP, IB learner profile

1. はじめに

世界では、社会の多様な場面でグローバル化が進み、その社会の中で活躍できるよう、「豊かなコミュニケーション能力」「異文化への理解」「問題解決能力」を有する人材が重要となってきた¹⁾。こうした課題に対し、それらを育成する教育として、IB (International Baccalaureate) の教育が注目されるようになった。

日本においても、文部科学省内に「IB教育推進コンソーシアム」を立ち上げ、2013年には、2018年までに国際バカロレア認定校等を200校に大幅に増加させる目標がたてられるほど注目された²⁾。本校では、このような世の中の流れの先駆けとして2007年からIBプログラムを取り入れ、2009年3月にIBワールドスクールとして認定された。そして2021年度より玉川学園ではIB Programs Divisionが独立し、その中で玉川学園が創立当初より大切にしてきた「自学自律」の考えのもと行う「自由研究」という授業が実施されることとなった。

このような経緯の中、「TAP」(Tamagawa Adventure Program)こそが、全人教育とIB教育を強く結びつけ、実践するのに最適だと考え、講座の1つとして採用されたのである。

本稿では、玉川学園におけるIB教育と自由研究「TAP」の位置づけを説明し、今の時代に求められている能力を、TAPを通してどのように育むべきか、またTAPの基本理念である「行動する全人教育」と「IBのエッセンス」をどのように融合させることができるか明らかにしたい。

加えて、その考えに即した活動を実践事例として紹介することで、今後のIBプログラムとTAPの関連について研究を進める上での緒としたい。

2. 玉川学園におけるIB教育とTAPのつながり

「全人教育の歴史と展望」³⁾にも書かれているように、玉川学園は全人教育を理念として1929年創立者小原國芳によって誕生した。創立当初より、常に新しい時代を視野に入れ、教育環境を整える努力を続けてきた。

一方IBは、1968年、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理

解して、そのことに対処できる能力を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせることを目的につくられた。また、国際的に通用する大学入学資格(国際バカロレア資格)を与え、大学進学へのルートを確保することも目的の1つである⁴⁾。IBは学校を運営する団体ではなく、学校と協力し、IB認定校を認可し、国際的な資格を付与する認可団体である。そして学校や政府、国際機関とともにチャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みづくりにも取り組んでいる。

このようなIB教育を玉川学園が取り入れた経緯には、社会が生徒に求める価値観を伝え、生徒の基礎学力の向上を図る教育改革に即したものと考えたからである。玉川学園は「全人教育」を教育理念として、真・善・美・聖・健・富の6つの価値を調和的に創造することを追求している。IB教育のバランス性に富み柔軟性のある枠組みは、玉川学園の教育理念に最適と考え導入されたのである⁵⁾。

TAPは1999年に玉川学園とPA (Project Adventure) の間で、教育活動を通じて日米交流を促進する事業に協力して取り組むという協定を結んだことから始まった。そして2000年当時、教育界は多くの問題を抱え、子どもたちの豊かな心を育む環境をいかに促進するかが課題の1つであった。そうした社会状況に対応し、21世紀の豊かな教育社会を創成するために、玉川学園では「行動する全人教育」をテーマに心の教育実践センターを発足させ、児童・生徒・学生をはじめ教職員に対してTAPを導入し、玉川学園全体として取り組み始めた⁶⁾。

この一見バラバラのように感じるこれらの教育は、IB教育も、TAPの原型となっているアドベンチャー教育も1人の教育学者によってつくられたものである。

それがドイツのユダヤ系教育者クルト・ハーンである。同じ時代を生きた小原國芳とクルト・ハーンは実際に関わることはなかったものの、教育的思想で大きな共通点があり、TAPはそんな両者の想いが深く影響した活動となっている。

このように小原國芳によって生まれた全人教育とクルト・ハーンによって生まれたIB教育は時代を超えて結びつき、その両者の思いが重なり生まれたTAPこそがIB自由研究に最適だと考えたのである。

3. 教育の歴史的背景とこれからの教育

ここからTAPの授業を進めるにあたって、具体的にどのような能力を育むべきかを考察する。

芹澤 (2021年)⁷⁾によると、戦後の経済復興期から高度成長期、日本は貧困で、国の復興のためみんなが同じ方向を向き、豊かになりたい、良い暮らしがしたいと共通の欲求があり、その結果、世界でも稀に見る高度経済成長が成し遂げられた。当時は「不撓不屈」の精神が重んじられ、真面目でコツコツ根性と忍耐で頑張り、わがままを言わず、努力し続ければ出世もでき、幸せな人生を歩むことができた。

教育現場では自分で物事を考えることのできる、自立した子供より、教師の扱いやすい団体行動の得意な子が優秀とされた。また新しくイノベーションを起こすような自由な学びより、日本の産業を支える、コツコツと真面目に働くための学びをし、教室では教師が中心となり、知識の獲得を重視する「系統主義」の時代が長く続いた。

その後目覚ましい経済成長を遂げ、国全体が豊かになり、経済の安定期となった。この時期になると、国全体から個性や自己実現が重んじられるようになった。さらにバブルが訪れ、人々は

お金を持つようになり、自らの力で夢を掴むことが大切とされた。このような個性尊重の観点から子供中心で、学習に臨む態度や考える力を重視する「経験主義」の方法へと変わっていったのである。

しかし1973年以降長く続いた安定成長期も終わり、1991年にはバブルが崩壊し、時を同じくして、東西冷戦の終焉を迎え、世界中どこへでも進出できるグローバリゼーションが進行した。

そして現在、自らの夢を自らが掴む時代となり、生き方や価値観が多様化する中で、学びに関しても大きく変えていく必要が出てきたのである。

そんな中、1つの論文が出された。「The Future of Employment—コンピューター化によって仕事は失われるか」(2013年) 英オックスフォード大学でAI(人工知能)などの研究を行うマイケル・A・オズボーン准教授らが発表したことに端を発している⁸⁾。彼の論文によるとアメリカ労働省のデータに基づいて702の職種が今後どれだけコンピューター技術によって自動化されるかを分析し、その結果が今後10～20年程度で総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクがあるというものであった。ここから学び取れるものとして、今後子供たちが歩んでいく未来は、想像しても仕切れない世の中であり、社会のニーズに合わせた教育から、見通しの立たない社会に向けた、見えない未知の力を育てなくてはならないということである。

ここからは、今後必要となる力をどのようにTAPの自由研究で培っていくべきか、IB教育カリキュラムから考察する。

4. IBの狙い

IBの教育は、下記の図のようにIB Learner Profileを中心としその周囲に「学習の姿勢」「教える姿勢」「概念」「グローバルコンテキスト」がある。この中で「IB Learner Profile」「学習の姿勢」「概念」はTAPにおいてもとても重要なアプローチと考え、その点に関して述べていきたい。



「IB MYPプログラム」(文部科学省HP 「IB教育推進コンソーシアム」参照)

- ・IBのLearner Profile (IBの学習者像)⁹⁾は下記の表1のようになっており、具体的な上、TAPの活動の際に関連付けしやすいものとなっている。本校ではこのポスターを各教室に掲示し、IB Coreという授業の中では、IBのLearner Profileを授業内容に取り入れ深めている。また他教科においても、IB教員はこの学習者像を常に意識し授業を行い、定期的に開催されるIB集会では、教科内でIBの学習者像を象徴するような行動をした児童・生徒に対し、表彰する活動

も行っている。

表1 「IB学習者像」(IBOガイドブック2013「IB学習者像」を引用し筆者が作成)

項目	内容
探究する人	私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。
知識のある人	私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。
考える人	私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。
コミュニケーションができる人	私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。
信念をもつ人	私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。
心を開く人	私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見いだし、その経験を糧に成長しようと努めます。
思いやりのある人	私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。
挑戦する人	私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。
バランスのとれた人	私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。
振り返りができる人	私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

・学習の姿勢(ATLスキル: Approach to Learning)

IBの学習者像を向上させる更に具体的な方法として表2のATLスキルがある。これらはTAP活動後の振り返りの際の大きな手掛かりとなる。

表2 「IB保健体育ATLスキル」(「保健体育におけるATLスキル」を参照し筆者が作成¹⁰⁾)

ATLスキル : Approach to Learning	
Social Skills	他者のパフォーマンスを改善するため、技術面における具体的なフィードバックを与えられる。
Research Skills	健康の様々な局面と、それが健やかな心身の育成に与える影響について理解する。
Thinking Skills	スポーツにおける各戦術メリット・デメリットを評価できる。
Communication Skills	チームが効果的に動けるように、言葉だけに限らないコミュニケーションシステムを構築する。
Self-Management Skills	精神力を強化するための前向きな思考を実践する。

・概念主導型カリキュラム

IBでは、知識を伝達し事実を機械的に暗記するだけの教育よりも、個人が理解したことを伝え、協働で意味を構築する教育を重視している。そのため、IBプログラムの指導と学習では概念理解が重要かつ揺るぎない目標となる。概念とは「大きな考え方」である。普遍的な原則や考えであり、その重要性は、特定の起源、主題、ある時代の場所などといった側面を超越するものである。概念は、生徒が個人的、地域的、そしてグローバルな重要性を持つ課題やアイデアを探究する時の媒体となり、科目の本質を掘り下げる手段を提供するものである。

以下の項目について生徒を奨励するために、MYPでは、概念ベースのモデルが採用されている。

- ・事実を概念および本質的な概念の理解に関連付けながら、より深い知的レベルで事実に基づく知識を体系的に整理する。
- ・新しい知識を習得済みの知識に関連付けながら、自分との関連性を創出し、知識の受け渡しを通じて、グローバルなコンテキストから文化および環境に対する理解を促進する。
- ・学習意欲を高めるために、個人的に単元テーマに集中するために主要概念を用いつつ、個人的知力を勉学に活用する。
- ・説明の際に事実情報を用いてより深い概念の理解を支援し、言語の上達度を高める。
- ・学問分野固有の関連概念の勉学を通じて、複雑な地球的規模の課題を分析し、テーマを深く掘り下げながら、高レベルの批判的、創造的および概念的思考を達成する¹¹⁾。

この概念主導型カリキュラムは、本質を追究した考えであり、この本質を探っていくことは、見通しの立たない社会に向けた、見えない未知の力を育てる上での出発点となり、TAPにおいても活動を活動のまま終わらせないための重要な考えである。

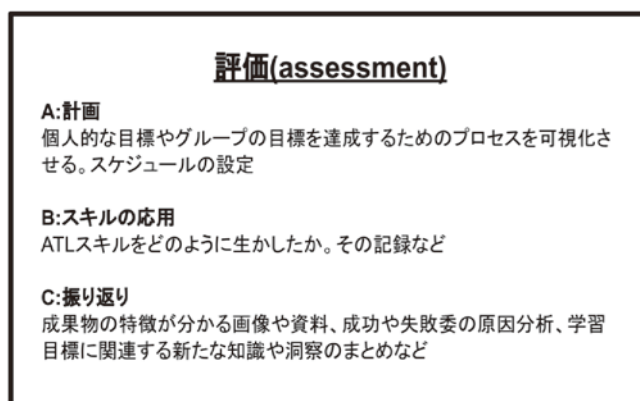
5. IBの自由研究の狙い

IBのカリキュラムにおいて自由研究は、各プログラムの集大成として行われる、MYP (Middle Years Program) のパーソナルプロジェクト、DP (Diploma Program) の課題論文にも繋がる準備段階として、大切な役割を果たしている。

そして目的は下記の7つようになっている¹²⁾。

- ①生徒は、持続可能な探求活動に参加し、大部分を自身で主導して行う。
- ②生徒は、関心のある分野についてより深い理解と新しい視点を発展させる。
- ③生徒は、長期間に亘ってプロジェクトを完了するために必要なスキル、姿勢そして知識を示す。
- ④生徒は、様々な状況で効果的にコミュニケーションをとる。
- ⑤生徒は、学習を通じて、また学習の結果として責任感を示す。
- ⑥生徒は、自身の成果に誇りを持つことを学ぶプロセスを経験する。
- ⑦生徒は、自身の成長と発展を確認し、示すことができるようになる。

これらの目的を果たすためのAssessment (評価) は以下の3点である。それぞれ8段階で評価を行う。



「IB自由研究 評価 項目」(「IB Jiyukenkyu Guide2021」より引用)

6. 自由研究の活動

4月22日からスタートした自由研究のTAPは、幸いなことに30名を迎え、IB自由研究の中で一番大きなチームとなった。第1回の授業では児童・生徒にGoogleのFormを利用し授業進行方法のアンケートを行った。アンケートをもとに児童・生徒たちと教師で話し合いを行い、IB自由研究TAPの本年度の活動目標は、「TAPの手法を活用し、IB Learner Profileを高める」とした。そして、グループ活動(5グループ6人組)を中心に授業を展開していき、そのグループ内でIB Learner Profileの10個を網羅できるよう担当を決めた。また担当する課題に対し、活動を通してどのように感じたかを振り返りの中でシェアし、グループ全体で10個のIB Learner Profileを向上させるとなった。

そんな中、TAPは「行動する全人教育」と銘打っているにも関わらず、コロナ感染症対策のためオンラインが続いてしまい、座学での活動を余儀なくされ、生徒には大きなストレスをかけることとなってしまった。

ここからは実践報告として、「オンライン期」「対面アイスブレイク期」「対面ローチャレンジ期」「対面チームチャレンジ期」の4期に分けて紹介する。

「オンライン期」

・実施内容

オンライン授業では、新学期ということもあり自己紹介を行い呼ばれたい名前の確認や、家の中のものでオンラインしりとりをし、アイスブレイク活動を中心に行った。

そしてオンラインの利点を活かし、このTAPで獲得してもらいたい、リーダーシップについても、ZOOM機能のブレイクアウトルームを活用し、グループディスカッションを行った。

その後は個人で、リーダーシップ論について調べ学習を行い、世界のリーダーの特徴なども学び、更にそれぞれのお気に入りのリーダーシップに関わる本を見つけ自由研究TAPメンバーの前でプレゼンテーションする活動を行った。

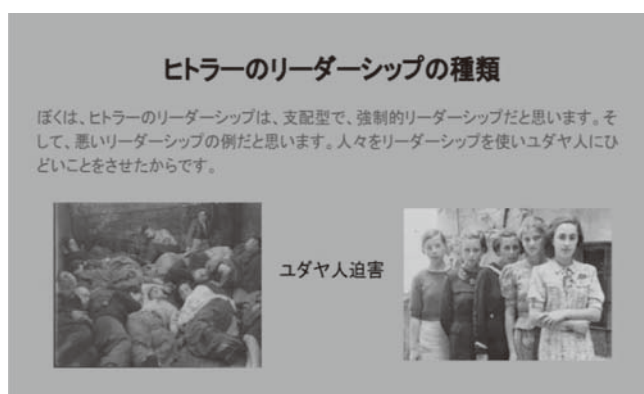
・児童・生徒の様子

オンライン学習ということもあり、最初はカメラをOFFにしながら参加する児童・生徒もいた。特に6年生～8年生という他学年との関りもあったため、少し最初は緊張感のある雰囲気です。授業が進んだ。また呼ばれたい名前を出す際にも、周囲に気を使って苗字のみという児童・生徒もい

た。しかし、オンラインしりとりの中で、徐々に個性的な存在も出始め、緊張からリラックスへと変わり始めた。ZOOMを利用したグループディスカッションでは、各ブレイクアウトルームですっと黙っているグループもあり、どのように切り出せば話が進むかなどのアイデアを持っている生徒が少なかった。しかし個人作業の調べ学習では、自分のペースでコツコツと取り組むことができた。

・指導者側の感想

コロナ感染症により、子どもたちの人間関係作りがストップしてしまっていたことを実感させられる場面が多々あった。ブレイクアウトルームで無言の状態が続いていたことでも分かるように、コミュニケーションは図りたいが、どのようなリーダーシップをとれば良いか、そのテクニックを持ち合わせていないのがよく分かり、改めて丁寧にコミュニケーションスキルを伝えなくてはならないと実感した。その一方で、プレゼンテーションに関して、他教科でも多くの発表機会があるためか、大変鍛えられている印象を受けた。発表方法、発表内容ともに素晴らしい児童・生徒が多く、最終的には日常生活に結びつけることや社会問題への関連、今後のTAP活動へ関連付ける発表もあった。そのプレゼンテーションの発表の中でも、特に印象に残ったのは次の児童である。



6年生男子の発表内容

リーダーシップと聞くと、常に良い方向へ導くという印象を持ちがちだが、上記のように、ヒトラーを例に挙げリーダーシップを悪い方向に活用したことを取り上げた児童が出てきた。この物事を多角的に捉え、日本のみならず世界に目を向け、独創性ある発表は、高く評価できるものであった。そして、このような発表が行われる背景には、「4. IBの狙い」でも述べた、IBの概念理解が児童・生徒の中に浸透している成果であり、このような多様性あふれる集団が行うTAPは充実した活動になるのではないかと期待が膨らんだ瞬間であった。

「対面アイスブレイク期」

・実施内容

対面の授業では、TAPの醍醐味でもある様々なアクティビティを行うことができた。「ZOOM」というカードを利用したコミュニケーション活動や2人組で1人が目隠しをし、もう1人が誘導する信頼ゲーム、またフラフープを使ってのグループワークなどを行った。また、より活動的な「フリングネット」という、ネットの隅をそれぞれが持ち、ボールを高く上げ、他グループと協力しパスをするアクティビティを行った。

・児童・生徒の様子

オンラインでは関わっていたものの、実際に合うと少し照れがある印象であった。またソーシャルディスタンスを口酸っぱく言い続けていたこともあり、身体的にも精神的にも距離感のある活動が続いた。



IB自由研究TAP活動の様子①

上の①写真左側の活動をした際には、上級生に遠慮し、なかなかアイデアを出せない下級生や、失敗と分かっているが、自ら言い出せない者がいた。また失敗した際に自分自身の反省ではなく、周囲を攻撃する言葉が多く飛び交っていた。また、上手くいかない際にすぐに諦めてしまう児童・生徒も多数見られた。

・指導者側の感想

現在自由研究の最高学年である8年生（中学2年生）はコロナ感染症の影響により、2年近くオンライン授業というストレスを受け生活してきた。16年近くこの学年の生徒と接してきたが、初めて感じる生徒同士の距離感、生徒と教師の距離感である。これらの全てがオンライン学習の弊害とは言えないが、深く結びつくと感じる言動が対面学習に戻り、アクティビティを通じて受け取れた。

「対面ローチャレンジ期」

10月の体育祭終了後より、コロナ感染者も減少し、遂に念願のチャレンジコースに向けての活動がはじまった。



TPシャッフル

・実施内容

「TPシャッフル」の活動では、丸太の上にランダムに並んだところから地面に足をつくことなく、移動し誕生日順、背の順に並び変える取り組みを行なった。

・児童・生徒の様子

課題を解決する上で直接関与しない場所になった児童・生徒が、もう自分は関係ないという姿勢になることが多く、それが度重なる失敗に繋がっていた。それに対し上級生がリーダーシップを発揮し、全体の関わりが生まれ、チームワークを意識した活動へと変化していった。

・指導者側の感想

この活動では、とにかく自分の意見をぶつけ合うだけで、なかなか協力し合い、尊重しながらの活動とはならなかった。しかし、この状態を改善したいと考えた上級生の促しによって、活動がより良い方向に変わった。このことはオンライン時期にプレゼンテーションや調べ学習で獲得した「リーダーシップスキル」という共有知識があった成果であり、オンライン授業と対面授業が教育的につながった場面と言える。



ホエールウォッチング

・実施内容

「ホエールウォッチング」の活動では、シーソーのように揺れる板の上に全員が乗り、そこからバランスを保ちながら、場所を移動し、整列するなどのミッションに取り組んだ。

・児童・生徒の様子

この活動では、失敗した際に誰かのせいにするような発言や個人的な体重に関して攻めるような声があり、一度中止し、話し合いを行った。その後は、乗る板の位置やタイミング、ペアーなどを作るなど、より具体的なアドバイスが出始め、互いの頑張りを認め合うような発言も増えた。

・指導者側の感想

このアクティビティは、シーソーのような形状になっていることもあり、児童・生徒の興味関心の高い状態でスタートした。しかし互いの体重や体型のことで嫌な声かけが出てしまったため、活動をストップし、改めてTAPの活動をする際の約束を確認した。確認した内容は以下の概念についてである。

難波(2016年)¹³⁾はTAPの活動において相互尊重(Full Value Contract) FVCが重要であると言っている。これは「目標達成に向けての努力や言動には全て価値がある」と言うことを「規範」として位置づけ、それを約束することである。Full Valueとは、グループにおいて設定した目標達成を目指した活動をする際に個々の努力、言動や行動は全て価値あるものとして、肯定的に受け

容れ、それを認めようということである。また、活動前にそれを参加者同士で契約（約束）することを、Full Value Contractと呼ぶ。このFull Value Contractはいわゆる「ルール」に近い行動規範の役割を果たし、それによってアドベンチャーができる環境を学習者自身が主体的に築いていくことになる。個人の目標を最大限に尊重し、グループが支え、それに対してフィードバックする。そこから生まれた、尊敬と尊重の繰り返しによる集団成熟。そこに属することの「心地よさの共有」を目指すといったものである。

これらの概念の確認後は、丁寧な言葉がけ、行動が見られ、良いアイデアを言ったものに対しての尊重や勇気を持ってチャレンジした仲間に対しての尊重など、まさに相互尊重の関係が生じ、この集団の素直さが垣間見られた。



モホークウォーク①

・実施内容

「モホークウォーク」というアクティビティ。ワイヤーの上に乗る、足をつかないよう協力しながら決められた場所まで移動する。

・児童・生徒の様子

身体能力を披露するアクティビティではないのだが、綱渡りのように、何度も失敗しながら目的地まで向かおうとする個人での取り組みとなってしまった。その後時間が経過してもチームで協力し合う姿勢はなかなか出てこなかった。また、ファシリテーターが発信したルールを守る意識が乏しく、実施者に対しての安全を守ろうという姿勢が見受けられなかった。

・指導者側の感想



モホークウォーク②

モホークウォーク③

ここでは、安全について学ぶ良いチャンスとなった。自分の時にだけ、また自分のよく知っているメンバーにだけ手助けをしているところが散見された。難しいミッションを成功させるための方法をいくつか投げかけ、「勇気を持って行動するには、安全を担保することが重要である。」という考えを最終的には自分たちで導き出し、結果的に実り多い活動となった。

今年の活動の中で期待していた行動が出たのが、前掲の2枚の写真である。チームが目標達成のために様々な手段を試み、心の距離と身体的な距離が一気に縮まった瞬間であった。これはオンラインでは決して学べないことであり、この年代で獲得させたい相互尊重の部分である。そして、このTAPでの活動を意図的に学年縦割りにし、男女合同にした部分も良い影響が出始め、互いの特徴を理解し、手を取り合うことが多くなった。これらの活動を通して8年生がIB自由研究最上級生として自覚が徐々に芽生え始めたことも成果の1つである。

「対面チームチャレンジ期」



IB自由研究TAP活動の様子②



IB自由研究TAP活動の様子③

そしてついにチームチャレンジコース（以下：TCC）に向けての活動が始まった。以前までの大きく溝の空いたような関係から、徐々に自由研究TAPメンバーとしての団結感も芽生えはじめ、ハーネスを付ける際にも、様々な助け合いが生まれてきた。安全を、自己責任とするのではなく、互いに大切なメンバーを守るための自然な確認の仕合に、この短期間での心の成長を感じ取れる一幕であった。



TCC①



TCC②

・実施内容

メンバーを4グループに分け、TCCに挑んだ。上段（地上8m）の「クロスワイヤー」「チー

ムトラバース」下段（地上5m）の「マトリックス」「ビームス」を実施。各班にはTAPスタッフに入っただき、さらに大学生インターンのサポートも受けた。

・児童・生徒の様子

念願のTCCに対し、高いモチベーションで児童・生徒が参加できた。地上高のこともあり緊張感のある中良い声掛けが飛び交い、またローチャレンジコースでもあった、様々な助け合いがTCCでも引き続き見られた。チャレンジ終了後は、チームとしての達成感を得ることができた。

・指導者側の感想

日本唯一のTCCに子供たちは心躍らせ活動することができた。半年前のお互いの無関心さは微塵も感じさせない、TAPを通してこのコロナ禍の2年を埋めるべく、とても充実した活動となった。そして、チャレンジ後の笑顔は、教育現場で本来、私たちが当たり前であった姿ではあるが、やっと取り戻せたような表情であった。TCCの翌週には、自由研究の時間で振り返りを行い、TCCを通してどのようにIB Learner Profileの能力が向上したか振り返りを行なった。

資料 7年生女子の毎回の授業振り返り

自由研究TAPについてのまとめ	
2021/4/22	みんなと話していく中で、似ている絵を見つけるゲームでした。似ている絵を持っている人がぜんぜん見つからず、最初は何がしたいのか全然わかりませんでした。最終的にはすべての絵が繋がったのが面白かったです。私は、このとき、スキルを伸ばすことができなかったけれど、次にやるときは、Communicationスキルを使えるようにしたいです。 8年生がたくさん声掛けをしてくれて、みんながコミュニケーションを取ることができたと思います。私もこういうときに、もっと積極的にコミュニケーションができるようにしたいです。だから、これからは、もっと人と話すことを意識したいです。
2021/5/6	ニックネームは、固く考えず恥ずかしがらずにきめました。みんな工夫したニックネームを使っているのいいと思います。私はこのニックネームづくりで、IB Learner profileのRisk-Takerのスキルを伸ばすことができたと感じています。 家にあるものしりとりでは、6、7年生チーム、7、8年生チームに分かれて、家にあるものだけでしりとりをしました。オンラインなので、チームワークは生まれにくかったのですが、みんなでしりとりをするだけなのに、普通のものより難しくて楽しかったです。特に誰ということではなく、みんなが一生懸命やっていたことが良かったと思います。私はここで、Thinkerのスキルを伸ばすことができたのではないかと思います。
2021/5/13	今回はリーダーシップについて学びました。リーダーシップとは何なのか、どんな種類があるのか、どんな人がいるのかを学びました。自分たちで一つ本を選んで、リーダーシップについて話す。6月10日まで。この課題は、本からの情報を最大限に活用することが大切だと思います。この課題では、私はInquirerのスキルが必要になると思います。

資料では、TAPはIB Learner Profileの向上に最適であるとの狙い通り、多くの児童・生徒が自らの担当した項目に対し、具体的で実践的な振り返りを行うことができた。

またTCCを終えての振り返りでは、「チームの仲間と共に8mという高さで目標に向かって行動し、目標を達成する過程での仲間の表情や感情、雰囲気や口調などにも気を配り、そこから多くの気づきが生まれた。」という振り返りがあった。これはまさに近年注目を浴びているSEL (Social and Emotional Learning)¹⁴⁾である。これは日本語では「社会性と感情の教育」と訳され、これは相手の表情や仕草などから感情を掴むことを学び、他者への思いやりや気遣いといった社会的能力を身に付けるための学習である。現在のコロナ感染症による様々なストレス時代に、更に6年生から8年生という心と身体が大きく成長する年代に、この考え方は最適である。自分の

感情と他人の感情を理解し、社会の中で適切に行動できるための知識やスキルを学習することはTAPの活動価値を飛躍的に高めることに繋がる。アメリカでは実際にSELがエリート校から指導困難校までに採用され、ホール・チャイルド（全人教育）の育成に欠かせない分野として捉えられている。TAPを行う際にSELの考え方を利用し、ライフスキルの向上を図れることは大変魅力的な方法であると児童・生徒たちの振り返りから得られた。

7. 振り返りと今後の展望

IB自由研究のTAPでは、児童・生徒の未来を見据え、活動を通して必要となる能力を育むことを目的に4月よりスタートした。そしてその具多的な方法としてIB Learner Profileの向上を目指し、アクティビティに臨み、結果的に、大きく成長できたことが活動からも見受けられ、児童・生徒の振り返りからも読み解けた。前述したようにTAP授業実施当初の様々な「距離感」が、この数回の活動でドラマチックに改善していく様は、指導者として大いに感動し、改めてこのTAPという活動の教育的重要性の高さを感じ取ることができた。そして同時にIB生たちが、なぜここまで早いスピードで成長できたのかを考察した時、全ての教科指導で評価基準を明確にし、どのように努力することが良い成果に結びつくかということが容易に理解できるプログラムになっており、日々そのような環境下で学習するIB生だからこそその成果なのである。まさに文部科学省が推奨し、世界でIB認定校が増え続けている理由¹⁵⁾がそこにはある。今回児童・生徒が学んだこの体験は、2021年度3月に実施予定の玉川学園展で報告する。その発表形式は、今後必要となるプレゼンテーション能力を育成する狙いのもと、それぞれが担当した、IB Learner Profileに関して口述発表をする予定である。

最後に、今回IB自由研究TAPにおいて、IBの「未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせる」を念頭において指導したが、今後は、更なる充実を図るべく、下記の考え方にもチャレンジしていきたい。

それは、ESD（Education for Sustainable Development）¹⁶⁾の要素である。2015年の国連サミットにおいて先進国を含む国際社会全体の持続可能な目標（SDGs）¹⁷⁾が出され、ESDは目標4の「全ての人に包括的かつ公平な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」に位置づけられている。そしてESDが目指す持続可能な社会づくりを構成する要素に、下記の表3の概念がある。

表3 「持続可能な社会づくりを構成する要素」

（「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究」を引用し筆者が作成）

1. 多様性	2. 相互性	3. 有限性
4. 公平性	5. 連携性	6. 責任性

また、持続可能な社会づくりの課題解決に必要な「7つの能力・態度」が以下の表4である。

このESDの教育は、IBの学習者像やATLスキルとも考えが重なっていることがよく分かる。これを児童・生徒に意識させるのはもちろんのこと、TAP指導側の引き出しに入れることで、児童・生徒の興味関心の幅が広がり、活動がより濃いものへと変わると考えられる。このESDの研究を進め、これらの項目をどのようにTAPの考えに落とし込み、アクティビティを通して学ばせるかを、指導者側が紐付けする必要がある。またESDという、社会の関心の高いものを取

り上げ実践していくことは、玉川教育に根付いている「開拓者たれ！」¹⁸⁾という精神に繋がるものである。IB生が柔軟な姿勢で学び続けるのと同様に、指導者側も学び続ける必要がある。

表4 「持続可能な社会づくりの課題解決に必要な能力」

(「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究」を引用し筆者が作成)

7つの能力・態度	
①	批判的に考える力
②	未来像を予測して計画を立てる力
③	多面的・総合的に考える力
④	コミュニケーションを行う力
⑤	他者と協力する力
⑥	つながりを尊重する態度
⑦	進んで参加する態度

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省HP「国際教育の意義と今後の在り方—「理解」から「発信」へ」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/shiryuu/05080901/003/002.htm (2021年12月9日閲覧)
- 2) 文部科学省HP「国際バカロレアの推進に関する提言等」
<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/proposals/> (2021年12月9日閲覧)
- 3) 小原芳明『全人教育の歴史と展望』玉川大学出版部、2021年
- 4) 文部科学省国際バカロレア (IB) 教育推進コンソーシアム研究プロジェクト「日本における国際バカロレア教育の効果に関する研究」2019年度成果報告書、2020年 花井渉
- 5) 「国際教育ガイドブック」平成19年度 玉川学園、p.16
- 6) 工藤亘『アドベンチャーと教育』玉川大学出版部、2020年、p.1
- 7) 芹澤成司「生徒・進路指導の理論と方法」2021年5月15日、授業資料より参照
- 8) Frey, C. B., & Osborne, M. A. (2013). *The Future of Employment: How Susceptible are Jobs to Computerisation?*. Oxford Martin School Working Paper. (野村総合研究所 (2015)『雇用の未来—コンピューター化によって仕事は失われるのか』)
- 9) 玉川大学HP「国際バカロレアの使命IB mission statementと学習者像について」
https://www.tamagawa.jp/graduate/educate/column/detail_8692.html (2021年12月9日閲覧)
- 10) 『「保健体育」指導の手引き』、2014年9月発行、*Physical and education guide*の日本語訳
- 11) IBO (非営利教育財団国際バカロレア機構)『MYP—原則から実践へ』2014年5月発行、*MYP: From principles into practice*の日本語訳、p.18
- 12) 玉川学園「IB自由研究ガイドブック」2021年版、p.4
- 13) 難波克己、川本和孝「TAPにおけるアドベンチャーに関する諸理論に対する再考察」玉川大学TAPセンター年報 創刊号、2016年
- 14) 竹村詠美『新・エリート教育』日本経済新聞出版、2020年、p.14
- 15) 『「国際バカロレア」のいま、認定校、2022年までに200校超目標』、朝日新聞「Edu A」
<https://www.asahi.com/edua/article/14420275> (2021年12月13日閲覧)
- 16) 国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究」最終報告書
- 17) 文部科学省HP「持続可能な開発のための教育」
<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm> (2021年12月13日閲覧)
- 18) 「全人」玉川学園、2021年4月号 (No.859)